喘息のせいばかりでなく、水俣や水俣の周辺の部落をそっと歩いている。

世代的にいえば、昭和十一年の生れである。新生日本の幕開けの昭和二十一年が十歳、そして水俣病が公式に記録される昭和三十一年は成人の年である。「もはや戦後ではない」と経済白書は謳った。科学技術庁が発足し、日本原子力研究所は翌年の「原子の火」を灯す準備をしていた。

戦後日本の枠組みをなす議会民主主義の源流であるロックによれば、成人に達したとき青年は、自分の住む現社会を認めるか拒否するかの選択をしなければならない。認めるなら社会参加をして行くことになる。拒否すればどうなるか。親の財産をゆくゆくはもらうつもりの青年は私有財産制社会を否定するわけはないとロックは考えた。いかにもロックらしい。しかし社会が成人青年を迎え入れるのでなく、とにもかくにも青年自身が社会参加するかどうか決めるというのは、時代を画す思想であった。

さて、成人の私はといえば、科学技術の進歩に期待し、自然も社会も改造できると思い、そのかぎりで現前する社会を認めようとしていた。水俣は頭の中にまったく入ってこなかった。昭和三十五年、三池争議の現場に行ったときも水俣のことは考えになかった。今、水俣の地を頭を上げて歩くわけにはいかない。

ついでに年代記をすこし足すと、十年後の昭和四十一年、東海原 発が営業を開始し、中教審が「期待される人間像」を出した。私は 生物の実験的研究をやっていた。二十年後の昭和五十一年、四番目 の子にダウン症の星子が生れた。そして今年、当然ながら五十歳、 水俣に通いだして九年になる。

しかし、二十歳のころ水俣病のことが念頭になかったのは、身が 捉れることのあくまでバックグラウンドであって、もう少し直接的 な〈そっと歩く原因〉はあるのである。

岡本達明さんという人がいる。東大出のチッソ水俣工場第一労組の輝ける元委員長である。昭和四十三年に労組が「何もしてこなかったことを恥とし、水俣病と闘う」という「ハジ宣書」を出した当事者である。水俣の丸島に住む。この人のところへ東大工学部教授の西村等さんが連れて行ってくれた。西村さんはプランクトラの無機水銀の有機水銀化の予備調査で、私たちのチームとの共同研究ということで水俣に来ていた。岡本さんは彼に組合の長期方針をつくるデータか何かで恩義があるらしく、〈久濶を叙する〉的に和気に高々としていた。ところが私に向うととたんに目は燐光を放たんばかり、舌鋒鋭く、私は痛烈に罵倒された。私のフィルターを通すとかり、舌鋒鋭く、私は痛烈に罵倒された。私のフィルターを通すとめられるのに寄りかかって、そこらをウロチョロ歩くな」というようなことを言った。

罵倒されて喜ぶ人間はいない。でも、初対面で一方が一方をもの 凄い勢いでやりこめるというような事態は、憎悪だか愛情だかがか らんでいるはずである。もっとも、大学ではこういうことは絶対に 起らない。気色悪くなるほど紳士的である。情容赦なくたたかれる のは、大学の中に、いるかぎりはおこらないという意味で、きわめ て人間くさい。向かっ腹は立つ。でも岡本達明さんの言葉を正面切って反駁することはできない。

水俣・芦北地域を歩いて家々を訪ねると、大学の先生ということでは文句なく遇してくれる。教授だろうが助手だろうが、あまり関係はない。しかし、「さぞ御苦労様ですなあ」というねぎらいは、遠来の客を遇する一般的慣習のなかにとどまっている。そして大学の先生のやる仕事といえば、偉い仕事であれば自分たちと関係がないのだし、自分たちに関係してくるとすれば、それは一知半解の仕事なのだ。せいぜい良くて、「ギョエテとはおれのことかとゲーテ 言い」というような、吹き出し笑いや (概要をかうだけである。ただ人々は慎み深く、優情をもって客にそのような気配をさとられまい

とする。もし人々が本音をもらしたら、それはたぶん岡本さんのような言い方に似て、しかしもっときついだろう。そこには学者そのものに対する根本的な疑義や警戒があるはずだ。

(常民)というふうな人々の慎み深さや優しさは疑うべくもない。 しかし学問研究に対して、あるいはそれをやっていると称する人間 に本音を吐かないのは、そのような心情だけからではないのである。 江戸時代に武士が村落をまわって聞き取りをする場合のことを想像 すると事情は明白である。守秘は村落民の絶対的義務なのだ。本音 の吐露は畢竟するところ体制に内在する暴力によって抑えられている。

人々ははっきりとした二重構造を生きてきた。自分たちを収奪し 支配する武士たちは徳川政権の意向によっていとも簡単に入れかわった。天皇はかすんでみえず、さりとて徳川政権が即国家でもない。 定住し生産し、苛斂誅求に対抗するための防衛的閉鎖的村落自治を 発達させた〈常民〉にとって、自分たちと関係なく首のすげかえが 行われる武士集団という〈向う側〉全体がばくぜんとした国家だっ たのだろう。そのような人々にとって、「科学には国境はないが科 学者には祖国がある」という、日本でも太平洋戦争中愛用される、 あのパスツールの言葉などはきわめて胡散臭く感じられたろう。

そして明治維新によって失職してしまった武士集団の多くは、自 らはなんとか官吏にもぐりこもうとし、子弟は国家立大学に血まな こになって入ろうとした。全般的に言って学問と国家は無理なく結 びつき、学問の担い手も総じて〈向う側〉の人々だった。〈常民〉 といわれる人々にとって、例えば水俣から海上二十キロの御所浦島 の横浦の、昭和三十二年の調査(田中一生)によれば、地引網の網 元で、子どもに学問をさせると役立たずの〈向う側〉の人間になっ てしまうと考える人が厳然としているのである。

国家すなわち〈お上〉と学問の、品悪く言えば〈つるんだ関係〉は、水俣ではことに歴然と見られた。「平時戦時ヲ問ハズ国家ノ存立上最モ緊要ナル地位ニアル」(昭和十八年漁業補償契約の条文)

新日窒は、後にチッソと改名するのだが、戦後、経営・技術陣とも 東大純粋培養型になり(児玉隆也『この三十年の日本人』所収の 「なぜチッソだけが」)、労災事故が頻発する平時の戦争を進めた。 例えば、私が漁業上いろいろと教えてもらった湯堂(水俣病激発地) の故宮下優さんの奥さんのフジエさんは二人の兄がいたが、二人と もチッソに勤め、一人は爆発事故で死亡、一人はミキサーに転落し て字義通りミンチにされてしまった。

そして水俣病発生後、水俣病隠蔽の国家の意志を明白に体現して 積極的に動いたのは、科学技術面では、チッソの東大技術陣を別に すれば、清浦雷作東工大教授、黒岩義五郎九大教授であり、結果的 に国家の意志に沿うたのは、水俣病昭和三十五年終焉説を説えた徳 臣晴比古熊大教授であり、その中間に黒に近い灰色の日本医学会会 頭東大医学部名誉教授田宮猛雄がいる。もちろんこれらの人々に多 数の学者と東大出の官僚がつながっているのである。

(向う側)の学者、あるいは学問をおさめた者と(こちら側)の住民、水俣にあっては主に海べの人々との間に、学問を通しての交通はない。だから徳臣氏が、いろいろ誹謗を受けたけれど、「私は己れに、また学問に忠実であっただけで些の悔いも無い」(『水俣』桑原忠成写真集、径書房、一九八六)と開陳したところで、海べの人々からいささかの共感も得られないだろう。徳臣氏が水俣病の原因究明にどれほど献身的であったかは当事者の知るところである。しかし、苦しみと怒りと怨みから、涙と悔いと祈りへと回帰する(こちら側)の人々とは縁なき衆生である。

〈向う側〉の学問と〈常民〉といわれる人々を結ぶパイプは、実利である。貧困を脱する実利的手段を生み出すかぎり学問は認められる。そして〈向う側〉の国家がらみの学問の振興の大方針は、明治日本が西欧近代に追いつくための、土台を切り捨てた実利追求だった。ピーエッチぬきのDづくりだったのである。人々の実利と国家の実利が一致するという幻想があるかぎりにおいて、人々に学問は迎え入れられた。

私は博士号をもっていないが、もし持っているとして外国へいけば ph・Dとして自己紹介をし、またそう思われたがるだろう。これはほとんど詐欺に近い。 ph・Dとはドクター・オブ・フィロソフィーの略であって、おしなべて博士は ph・Dだったのである。明治日本は時間を短縮するために、 phを和魂に、 Dを洋才に振り分けて後者を学問と称した。 phとは、根底において「学問とは何かキリキリ舞いすること」である。和魂にそのような懐疑と煩悶はない。和魂を否定しているのではない。和魂は無に溶解する肯定なのであるから、自然科学には向わないのである。

水俣に修苦と悲劇がかくも拡大してきた要因の重大な一つに、この煩悶なき博士、懐疑なき専門家を生み出してきた、そしてそのことによって日本国家に実利をもたらした日本国家立大学を挙げることができる。人々は実利だけは実感できた。しかし実利の肥大化は生存の危機をもたらす、そのことを水俣は示した。そして学問への不信はいよいよ抜きがたく、学問はいよいよ遠くなった。

(この稿は、昨年の五月に、ある雑誌の水俣大学特集のために書いたが、事情によって掲載されなかった、それに手を加えたものである。昨年の同時期の「動かぬ海」の文と対をなすという意味合いで、ここに入れさせてもらうことにする。と、えらそうに言っているけれど、要は原稿が間に合わなくなったということ)

